歴史散歩

れきしさんぽ No.29

久留米市の河童

久留米市瀬下町に鎮座する水天宮は全国水天宮の総本宮で、筑後川河童に因む伝承地の拠点でもある。平成17年2月、久留米市は近隣3町との合併により、さらに河童との関係を深めた。特に河童の里といわれる田主丸町の加入で、新生久留米市は河童の都市として活性化した感がある。

大正12年（1923）、中学明善校に勤務していた及川儀右衛門（1829～1974）の『筑紫野民譚集』は、筑後地方の伝説を集めた貴重な著作であるが、この中には、国分町日隈の「河童の接骨法伝授」や豆津橋付近に住む農民が「河童の手」を斬り落とした話など、近隣町村の河童伝承が幾編か収録され、『久留米市誌』上巻にも紹介されているが、ほかにも城島町芦塚では、馬を引き出そうとしている河童の手を鎌で斬った話や安武町小島の河童の穴の話などが濃やかに述べられている。

北野町の北野天満宮には「河伯之手（河童の手）」が保存されている。4本指に1センチほどの爪が生えた長さは12センチくらいの手首で、水掻きがあるのが特徴という。そのいわれに2通りある。一は、902年左大臣藤原時平の讒言によって大宰府に左遷された菅原道真（菅公）が九州下向の時の事件である。一行は大分に上陸し、筑後川を下って北野に至った際、追討の者に襲われた。筑後川の河童の総大将三千坊が菅公を助けようとして、敵に右手を斬り落とされたので、菅公はその手を手厚く葬り、旅を続けたという。二は、菅公が北野の川で馬を水に入れようとしたとき、河童が川の中から馬の足をつかんで引きずり込もうとしたので、驚いた菅公が河童の手を斬り落としたという。

地方によっては、河童が書いた「詫び証文」の伝説がある。御笠川のほとりにいた河童が人々に悪さをして菅公に戒められ、詫び証文を差し入れたので、以後御笠川は平穏を保っているという。

菅原道真と河童の関係は、「いにしえの約束ごとを忘るなよ 川だち男氏は菅原」（他に「ヒョウスベよ 川たちせしを忘れなよ 川たち男われも菅原」など）という河童禁呪の唱え文言で知られているが、菅原氏は河童信仰を管理する「川立ち」、すなわち水練の家柄であったと伝えられる。

北野天満宮

八代の「河童渡来の碑」

久留米の河童伝承は八代市の「河童渡来の碑」に由来するのだろうか。2個の石から成るこの碑は、球磨川の分流前川の右岸、徳の淵の堤防上にある。地元中島町内の史蹟保存会の人たちが口伝に基づいて建立したもので、碑文には、「ここは千五六百年前河童が中国方面から初めて日本に来て住みついたと伝えられる淵である。

この2個の石はガラッパ石と呼ばれ、350年来の橋石であった。ある日いたずら河童が付近の人に捕らえられた時に、この石のすり減って消えるまでいたずらはせぬと誓い、年に一度の祭りを請うたので、住民はその願いを諒とし、祭を当日の5月18日と定め、今でも『オレオレデーライタ川祭』と名づけて毎年祭を行っている。」と記されている。

上陸したのは九千坊と名乗る河童の大将が率いる一族郎党だったが、ある夏の一日、肥後の国主加藤清正の寵愛する小姓を河童が球磨川に引き入れて殺したために、清正の怒りを買い球磨川の河童は退治される運命に立ち至った。清正は、あるいは川上から毒を流さしめ、あるいは数千の石を灼熱して河童のいそうな淵に投げ込み、また広く領内に令して猿を集めさせた。河童は湯を浴びれば力を落としまた河童は猿に会えば力を失うという。そこで、河童たちは評議の末、謝罪することになり、清正領内の人民には決して危害を加えないことを約束して、難を逃れたという。

この話のタネは『倭訓栞』（谷川士清著、1830～62刊）にあるようで、その後編の「かはらう」の項を見ると、「加藤清正肥後の領主たりし時に狩り出て児扈従を河童に引入られしにより大に怒りて残りなく毒殺せんとす。其魁首を九千坊といふ。大になげきて僧に請ひて宥られんことを冀ひて免されぬるより肥後隈本の河童八害をなすことなしといへり。」とある。諸国見聞記『本朝俗諺志』（菊岡沾涼著、江戸後期）にも同様のことが記されているという。九千坊が登場するのは、江戸後期に至ってからであろうか。

清正の話は河童上陸の5～6世紀から1000年以上も経た16～17世紀に溯るが、その間河童たちは球磨川に常住していたことになる。

球磨川の九千坊を有名にしたのは火野葦平で、著書『河童会議』（文芸春秋新社刊、1957）によって河童のルーツが紹介された。すなわち、河童の大群は中近東のペルシャ方面からインドのヒマラヤを越え、タクラマカン砂漠を東へ移動、蒙古から中国を抜け、朝鮮から海を渡り、九州八代の徳の淵の津に上陸したというのである。これを受けて、河童渡来の時期を「三国志」の魏・蜀・呉時代に充てる向きもある。河童九千坊らがもたらした信仰は北辰信仰と水神信仰、思想は呉の太白の流れの思想と串山弘助氏は説いている（『九州河童紀行』）。

太白が建てた呉はB,C473年に越によって滅ぼされている。また、孫権が興した三国時代の呉は３世紀の国家である。しかし、河童あるいは異民族の八代上陸という「事件」は5～6世紀のころではなかったろうか。『日本書紀』応神紀や雄略紀に記す呉はゴではなくクレである。辞書をひくと、クレとは奈良朝よりも前の時代の中国の呼称で、一般に揚子江の南の地方、またひろく中国全土をも指す場合もあるという。

碑文にある「オレオレデーライタ」は、八代洋一訳によれば、「ウォレンウォレンデライタ」即ち「呉人呉人的来多」であって、標準語なら「呉人呉人的多々来了」になるところという（『河童渡来伝説と河童共和国』）。即ち、呉の国からたくさんの人がやって来た意になる。この場合もクレの人と解してよいのではなかろうか。もっとも、長期間にわたって波状的に渡来したものと推測される。

以上は八代に上陸し、九州に伝播した河童の動向であるが、特に古記録に記載されたものではなかろう。

筑後川

蜷川の荒五郎

八代の河童渡来説は伝説として貴重であるが、久留米には渡来説にかかわる江戸前期の古い記録が残されていて、八代の伝説を傍証する資料としてきわめて重要である。

寛文10年（1670）の『久留米藩社方開基』（『寛文記』とも）の山本郡蜷川村（現・久留米市大橋町蜷川）の条に、「筑後国山本郡蜷川村荒五郎大明神、牛馬之守護神、祢宜号酒見次大夫と、龍宮神智僧二年十一月廿三日ニ此界ニ上給候。荒五郎大明神を祝初候。」とある。

現在は「片淵神社」（祭神、弥都波売神・荒霊大明神）として鎮座するが、社前の説明板に、「智僧二年（五六七年）蜷川村発祥ノ頃二氏神トシテ初メテ勧請ス 初め荒五郎大明神ト崇メ荒霊宮ト称シタガ明治二至リ片淵神社ト改称シ大正元年ニ現住所ニ移ル 祭神ハ千年川（筑後川）氾濫ノ元トナル荒魂ナリ」とある。

片淵神社の木像

龍宮神が智僧（知僧）2年に久留米に示現し、荒五郎大明神として祭り始めたというのである。「知僧」は年号制定以前の私年号で、欽明天皇26年から同30年に至る約5年間に相当するという。『日本書紀』によると、欽明天皇は439年即位、32年間の治世の後、571辛卯年に没とあるので、知僧年は560年代後半になる。つまり、6世紀半ば、龍神（水神）の精霊である荒五郎が久留米で祭られたことになる。八代の「河童渡来の碑」に刻まれている時代とほぼ符号しており、中国では6世紀に栄えた南北朝時代の陳の時代に相応する。陳大王こそが龍宮神である。大隈正八幡宮（現・鹿児島神宮）の縁起によれば、陳大王の娘大比留女が日光を感精して孕み、八幡宮を産んだという。八幡宮は応神天皇とみなされるので、応神天皇を出産した神功皇后と大比留女とは同一女性と考えられる。『八幡愚童訓』に、「大比留女ハ筑前国若椙山ヘ飛入給キ。後ニハ香椎ノ聖母大菩薩ト顕レ給ヘリ。」とあり、『六郷開山仁聞菩薩本紀』には、「神功皇后崩御シ玉ヒテ後、（略）陳の武帝ノ姫宮ト再誕坐ス。是神功皇后ノ御霊行也。御名ヲ聖母大比留女ト号シ奉ル。」とある。久留米の場合、神功皇后は高良玉垂神に連動していくが、水神（信仰）が大陸から5～6世紀ごろ導入されたという点は八代の河童と共通の認識であり、河童渡来の伝承が江戸前期の久留米の文献で傍証されているのはたいそう意義深いことである。

因みに、『日本書紀』応神天皇14年、37年、41年、及び雄略天皇14年の条に縫衣工女の渡来に関する記述がみられる。すなわち、5世紀頃大陸からの機織り技術導入について述べられており、漢織・呉織は久留米の地名発祥ともかかわるとする説がある。蜷川の荒五郎はそれ以後に祀られたことになるが、筑後にもかなりの数の異国民が渡来して、漁労・航海・紡織などの技術をもたらすとともに水神信仰、海神信仰に影響を与えたものと推測できる。その意味で、蜷川の荒五郎大明神は「記録された渡来神」なのである。ところで、九千坊は清正の河童征伐により、球磨川には住めなくなり、筑後川へと移住した。久留米の殿様は「異国神」の受入れには前向きだったのであろうか。

尼御前社の荒五郎

奈良県に丹生川上神社がある。上・中・下の3社があり、中社に主神の罔象女神を、上社に高龗（タカオカミ）の神、下社に闇龗（クラオカミ）の神を祀る。京都の貴船神社とともに雨師神と呼ばれ、祈雨止雨に霊験あらたか神として信仰されてきた。これに対照されるのが水天宮の前身、尼御前社の祭神であろう。

『寛文記』の「久留米町中」の段に、「一、当社尼御前大明神、千年川之水神二て御座候。何之代より開元建立御座候哉伝不奉承候。」とある。尼御前を主神にして左右に荒五郎、安坊を配するという3神構成の形式をとっている。

尼御前社を創始した按察使局伊勢は奈良県の石上布瑠神社神職某の娘という。単なる憶測であるが、あるいは川上社の祭神を久留米に勧請して、筑後方式の3神構成で祭祀したのかもしれない。しかし、これら神像については像容も様式も明らかではなく、現存しないと考えられていた。一方、不可解なことに、寛文10年と翌11年とでは、大橋町常時の庄前神社の祭神が大幅に変更されているのである。同書によると、寛文10年（1670）に祭神は男神像（弓箭の守護神、牛馬の祈祷神）１体であったものが、翌年には４体に神像が増えている。すなわち、『九瀬宮庄前大明神記』には「罔象女命を中尊として相殿に安徳天皇並に相国清盛公・二位尼公共に四躰の神霊」。尼御前社は瀬下水天宮の前身であり、庄前神社は水天宮と深いかかわりを持つ。何らかの事由で尼御前社の神像3体を庄前神社に合祀したのではなかろうか。即ち、本来の男神像を安徳天皇とし、尼御前社の尼御前・荒五郎・安坊の三大明神をそれぞれ罔象女命・平清盛・二位尼に見立てたものと推測している。清盛と見立てられた神像は高さ14センチほどの河童像（荒五郎）で、村人たちは旱魃の時にこれを巨瀬川に沈めて雨を祈るという。

庄前神社に収められている明治13年の棟札には「大元尊神・罔象女神・五帝龍神」と記されていて神像に対する認識が時代によって変化していくことがわかる。

巨瀬川と河童

筑後川の支流巨瀬川（九瀬川）の河畔には河童を祭る神社が点在している。吉井町の高橋大明神、田主丸町小川の河童大明神、東町の馬場瀬宮、志床の「川ん殿」、唐島の「川ん殿社」、今村の「河童よど（ぼくりよど）」、そして大橋町常時の庄前大明神などである（行徳平八著『田主丸地方の河童』）。『浮羽町史』によれば、うきは市浮羽町妹川に鎮座する大山祇神社の御神体敷板の文禄3年（1594）銘の由緒書に、「この地は昔巨勢氏の所領で、白鳳年間に勅命で敵と戦って敗れた巨勢太夫がここに移り住み、その子蟻入道と号して老を養っていた」とあるので、巨勢（九勢、九十瀬）は本来は「巨瀬」だったようである。巨勢はさらに古くは「許勢」とも表した。『北筑雑藁』（1675跋）や『筑後秘鑑』に文武帝の時（697～707）筑後国山門郡に許勢部形見という者がいたことを伝えている。大和国高市郡巨勢郷（奈良県御所市古瀬町）が本拠地で、許勢小柄が祖である。そのルーツを溯れば武内宿禰に至るという。『新撰姓氏録』に「鵜甘部首（武内宿禰男己西男柄宿禰後）」とある。武内宿禰の9人の子息のひとりにコセのオガラのスクネがいた。

武内宿禰は、巨勢をはじめ、葛城・平群・蘇我の4氏族の祖といわれており、いずれも高良山と深いえにしをもつ。『和名抄』の国郡郷名の中に、筑後国生葉郡高西郷がある。妹川水天宮は高西水天宮とも称するが、高西は巨勢、巨瀬に通じ、筑後におけるコセの原点と推測できる。蟻入道が元祖の九十瀬入道ならば、同じ名で呼ばれる平相国清盛は2代目になる。巨瀬川の河童の大将は巨瀬入道で、筑後川の総大将は九千坊であった。(坂田健一　No.30号へ)

※文章背景の写真は田主丸町雲雀川周辺の河童像

巨瀬川

発　行：久留米市文化観光部　文化財保護課　〒８３０－８５２０　久留米市城南町１５－３
TEL 0942(30)9225　　発行日：平成21年　月　日